

暮らすような旅 II

～ 英国滞在記 ～

五十嵐静夫（江戸ソバリエ神奈川の会）

【旅のテーマ】

二年前の旅は「暮らすような旅」とは言いながら英国、スイス、南仏からパリまでと結構な移動距離だった。今回は人々の成熟した暮らしぶりに深い共感を覚えていた英国のみとし、夫婦で一年掛けてイメージを絞り込み、3つテーマに沿って旅することにした。

第一のテーマは毎年5月中旬に開かれるチェルシー・フラワーショーの見学。

第二に20世紀初頭の英国貴族社会を描いた大河ドラマ「ダウントン・アビー」の舞台ハイクレア城と広大な庭園を自分の足で歩いてみる。世界的に大人気となりNHKのBSプレミアムでも放送されている。

第三にかつて英国に駐在していた大学時代の友人が好んで訪れたという南東イングランドの古い田舎街を尋ねること。

これらを満足させる三週間位の日程を立ててみよう。当然、ロンドン市内に滞在しながらの話だから、治安が良く交通至便な地区のコンドミニウム（サービスアパートメント）を借りたい。

【旅の準備】

まずは、何と言ってもチェルシーのフラワーショーの開催期日に照準を合わせておかなければならない。しかし、毎年5月中旬か下旬の5日間に開催されているものの、まだ2016年はいつになるかははっきりしない。ハイクレア城も入場期日が極めて限られ予約も必要なのだ。

とりあえずフラワーショーの主催者 Royal Horticultural Society（王立園芸協会）とハイクレア城に翌年のスケジュールを直接問い合わせる。それぞれメールを登録しておけば、具体的に合った段階で回答するとのこと。

手始めに適当なコンドミニウムを Booking.com と Hotels.com の2つのサイトで物色してみることにする。前回、一押しだったアールズコート物件は見当たらない。仕方なしにロンドンブリッジに近い快適そうなものを仮予約する。

BA（英国航空）も一年前から比較的安価で予約できるし座席指定も可能だが、条件が厳しくキャンセルすると殆どお金は戻ってこない。まあ、行くと決めたのだから万難を排して準備するしかない。

そうこうするうち英国園芸協会からメールが届く。年会費（£55、当時1ポンド=170円）を払ってメンバーになれば、いち早くチケットを手に入れること（£80、同伴者1名は無料）ができ、5日間のうち初日、二日目はメンバーズオンリーでゆっくり見学できる。早速、カード払いで会費を納め12月に入って初日の5月24日（午後の部）の予約を完了。一方、ハイクレア城はカーン伯爵夫人の主催する城巡りと庭園ツアーが5月に開催されるとわかり、フラワーショーと重ならないよう22日を指定して予約（二人で£160）する。

これで日程の骨格は5月中旬から6月のベストシーズンと決まったので、じっくり詰めて行くのも楽しみだ。年末が近づき、Booking.com を通じて前回と同じコンドミニウムを借りられたのは幸運だった。

【暮らすような旅の出発】

年初から持病が悪化して旅行に行けるのかと心配したが、体調は回復し出発が近づいてくる。5年前の旅では大船から成田エクスプレスに乗り、品川駅で総武線の事故で運行停止となったため、スマホの情報を頼りに日暮里から京成スカイライナーに飛び乗りエアフランスの午前便にギリギリ間に合った苦い経験があった。2年前は念のため成田の全日空ホテルに前泊した。今回は羽田からの直行便なので安全圏内だ。

空港ではWifiの機材を借り宅急便のスーツケースを受け取ってから出発ロビーに進む。

【ロンドン滞在記】

コンドミニウムは、ヒースロー空港から地下鉄のピカデリー線で40分。アールズコート駅から徒歩3分の場所にあり、ロンドン中心部に近い。ケンジントン・チェルシー区にある閑静な住宅街の一角ながら食料品や日用品などの買い物も便利。二度目なのでまる我が家に戻ってきたような気分だ。

スーツケースを転がしながら見慣れた角を曲がり午後3時半に到着。チェックインを済ませてからマークス&スペンサーで野菜や肉、パンや乳製品、そして軟水のヴォルビックなどを買いに出かける。唯一、難のあった小さな冷蔵庫は大型に入れ替わっていて申し分ない。4階の角部屋で日当たりがよく、遠くにはロンドンの新しいシンボル三角柱の「ザ・シャード」も小さく見える。暮らすような旅の始まりだ。



朝食を済ませ、2015年にオープンした「スカイガーデン」の35階にある展望レストランで昼食するまでの間、バスを乗り継ぎターナーの絵画を集めたテートブリ

テンへ行くことに。公共交通機関の乗り降りに便利なオイスターカード（磁気カード）をあらかじめ用意しておいたので小銭がいらない。

ロンドンのバス路線は複雑で敬遠気味だったが、スマホの乗換え案内を利用すれば労せずして目的地まで行ける。地下鉄も便利だが赤い二階建てバスは素の景色が見られる。エリザベス女王の生誕90年を祝う雰囲気漂う街中を巡りながらスカイガーデンを目指す。展望台は予約さえすれば誰でも無料で登れるが、巨大ビルの1階は案の定、長蛇の列。「ダーウィン」という名のブラッセリーを予約しておいたので、セキュリティチェックを経てすぐにエレベーターに乗れた。



建物の最上階が文字どおり緑の植物園になっており、眼下にロンドン塔やタワーブリッジ、セントポール寺院を見下ろせるのが嬉しい。



昼食を済ませ、風に吹かれながらロンドンブリッジを渡って対岸の「バラマーケット」に到着。地下鉄の高架下であり市民の胃袋を満たす大きな食品市場で、野菜

や果物、肉、惣菜なども品物が豊富だという。でもパリのマルシェなどと比べると陳列が雑で鮮度もイマイチ、よって見て回るだけに。

ちなみに、英国は物価高だが食品は消費税に当たるVAT（20%の付加価値税）の対象に入らないため、ほとんど日本と同じか若干安い。

次の日は、ビクトリア女王が幼少時を過ごし、かつてはチャールズ皇太子とダイアナ妃が住まわれ、今ではウィリアム王子とキャサリン妃一家が移居するケンジントン宮殿に足を運ぶ。宮殿も興味深いのが、敷地内にある華麗なカフェ「オランジュリー」は、その昔オレンジ栽培の温室として使われていた建物だ。実はそこでアフタヌーンティーを気取って見たかったのだ。

アフタヌーンティーは食事を兼ねた喫茶で、1840年頃にお腹をすかせたベッドフォード公爵夫人のアンナ・マリアが考案したと伝えられている。三段重ねのティースタンドには、一番上にケーキ類、二段目にスコーンやマフィン、下にはサンドイッチが彩り豊かに並んでいて、下から上に向かって食べて行く。ちょっと小洒落た軽食だがヴォリュームに不足はない。



「ミルクと紅茶はどちらが先か」といった古典的な論争は、カップの質が悪く熱いお湯でヒビが入るような昔の話。紅茶が先というのが今日の相場だ。

お茶とお茶請けには普遍性がある。アフタヌーンティーの形式は中国の点心や飲茶に酷似している。恐らく清朝末期に起きたアヘン戦争を経て、古い習慣が英国に伝わったものではないかと勝手に想像している。

この国の食文化を育んだのは輸入食品だ。チーズやワインはフランスから、香辛料は東南アジア、紅茶は中国からオランダ経由、砂糖は中南米やカリブ海からそれぞれ入ってきた。産業革命は綿織物の機械化に始まるが、極めて高価な輸入食品や陶磁器などの代替品を、どうやって安く大量に製造するかという欲求が原動力になったことも見逃せない。



【ダウントン・アビーの世界】

NHKのBSプレミアムでは、今年も12月4日からシリーズのシーズン5が始まる。シーズン4までご覧になった人も多いと思う。副題にある「華麗なる貴族の館」の舞台として脚本を書いたジュリアン・フェローがこの城を選んだ。

二つの大戦を経て、まるでドラマのように貴族が没落してゆく歴史を刻んできたハイクレア城は、ハンプシャー州の美しいイングリッシュフィールドにある。ロンドンのパディントン駅から列車で1時間、ニューベリー駅からさらに車で15分かかる。

1895年にロスチャイルド家の令嬢がカーンボーン伯爵に嫁ぎ、ともに華麗な時を過ごした建物は、国会議事堂と同じ建築家（チャールズ・バリー）が設計し、優美な庭園もチャーチルが育ったブレナム宮殿を手がけた造園家ケイパビリティ・ブラウンが心血を注いだもので、ともに歴史的・文化的な価値が高い。

120万坪という見渡す限りの大地で、5,000頭の羊たちがゆっくりと草を食んでいる。興味のある人は以下のURLをクリックして実際の光景をご覧ください。



小さな田舎駅なので念のためタクシーを予約しておいたのが正解。ドライバーのポールが「カナダ人のふた組の夫婦を同乗させてもいいか」と言ってきた。同じ日に城巡りにきたのも何かの縁、幸い8人乗りのワゴンタクシーだったので一緒に出発。トロントからやってきた彼らも、ロンドンのキャナリーにあるコンドを借りてフラワーショーにも行くそうだ。英国やカナダではすでに最終章のシーズン6が終わっているのだから、彼らが知っている結末は絶対に言わないでくれと冗談を交わしながら門を通過し、さらに緑に包まれた敷地をしばらく進むとあのダウントン・アビーの世界が広がっていた。

ハイクレア城を背景に自ら庭園を案内する第8代カーンボーン伯爵。第5代伯爵はエジプトでツタンカーメン王の墳墓を発掘したことで有名だが、夫人のアルミナ・ウォンベルがロスチャイルド家の財力を惜しみなく使って伯爵と城を支えたことで今日がある。





参加者たちは2つのグループに分かれて庭園を散策した後、大きな天幕の下で手作りのサンドイッチやケーキなどで楽しい昼食休憩を取る。午後は城内に入り

ピロティに集まって元公認会計士だったフランス系イギリス人の現伯爵夫人フィオーナによる城や庭園のレクチャーを受け、それから部屋の見学が始まった。往時より減ったとはいえスタッフ数は70名、全300室のうちベッドルームだけでも60室もあり、伯爵家の日常生活の世話や庭園の整備、見学者の対応までこなす。誰も住んでいないカビ臭い古城でなく、生活感の感じられる優雅な城で、維持管理コストは年間1億円を超えるという。ドラマのおかげで撮影料や見学者からの入場料が入り、伯爵夫妻の努力も実ってこのレガシーは当分の間持ちこたえられるだろう。

<https://www.highclerecastle.co.uk> :

【チェルシー・フラワーショー】



1862年にケンジントンで始まったフラワーショーは、1913年にチェルシーの王立病院の敷地に場所を移して現在の姿となった。正式名はザ・グレイト・スプリング・ショーといい、第二次世界大戦中を除いて庭園愛好家を魅了してきた。とりわけ今年はエリザベス女王の生誕90周年に当たるため、5日間で16万人



もの人々が訪れひととき賑わったようだ。

珍しい花や植物のパビリオン、様々な園芸用品の展示・販売場、毎年行われるガーデンデザイナーのコンテスト、有名なミュージシャン達の演奏会など見所が多い。コンテストでは今年も日本人のデザイナーが、匠の部門でゴールドメダルを受賞したようだ。

フードコートが充実していて有難い。深紅の制服を着た退役軍人のボランティアたちの姿が、いかにも英国らしい華やかな雰囲気を演出している。

「The Best place to find the God is in the Garden. You can dig for him there」

誰でも魂を揺さぶられるようなジョージ・バーナード・ショーの言葉に、庭の愛好家が増え続けている理由を見るようだ。

【南東イングランドの田舎街】

「ロンドンから行けるお薦めの街はどこか」と尋ねると、即座にその友人はライとカンタベリーと答えた。ライはフランスとの間で何度も争奪戦が繰り返



げられたドーバーの三大港の一つ。交易の中心地として栄え、今でも石畳と赤茶けた中世の家並みが残るイングランドで最も美しい街との評判だ。

セント・パンクラス駅から東ミッドランド鉄道で日立車輛製の快適な高速列車でアッシュフォード・インターナショナルまで行き、ローカル線に乗り換える。ロンドンから1時間半でサセックス州のライ駅にたどり着く。



16世紀の建物をスタイリッシュにしたホテル「ジョージ・イン」のレストランで、おもむろに昼食を取ってから街の散策を始めることに。

名物の帆立貝

の料理と新鮮なラムローストは、さすがにシェフがロンドンの一流ホテルで修業した人だけに申し分ない。



1120年に建てられ18世紀に大修理が行われたセント・メアリー教会は高台にあり、時計塔が街のシンボルとして時を刻み続けている。

内部の身廊で



木造の天井を見上げていると、隣街のヘイスティングスから孫を連れてやってきた老夫婦に「屋上まで登ると素晴らしい景色だから案内しよう」と誘われ、狭い階段を登ってゆく。1066年に英国がフランスと干戈を交えたヘイスティングスの戦いは世界史で学んだが、2002年から英国で放送されていて、NHKでも人気のあるドラマ「刑事フォイル」の舞台となった街だ。その話をすると「君達もフォイルを見ているのか」と親しそうな笑顔が印象的だった。

この教会のもう一つの見所は、北面の回廊にある1891年にバーン・ジョーンズが手掛けたステンドグラスで、見たことがないような美しさだ。

カンタベリーはケント州の古都で英国国教会の総本山がある。14世紀にチョーサーによって書かれた「カンタベリー物語」でも有名だ。大聖堂には国教会



の巡礼者が絶えないし、世界中から中世の面影をたっぷり残した街並みを見に大勢の観光客がやってくる。静謐なライとは違い少し賑やかすぎるかな。

【ブレグジット】

前回の2014年は、スコットランドで英国から独立すべきか9月に住民投票が行われ、反対55%、賛成45%で独立推進派が破れた。今回はキャメロン首相がEUからの離脱を国民投票にかけ、まさかの離脱派が僅差で勝って国家的な危機に陥った。いわゆるブレグジットの具体的な手続きはメイ新首相に委ねられたが、スコットランドでは独立運動の動きが再び活発化しているという。行くたびにハラハラさせられるこの国は、衰退の流れを加速しながらどこに行こうとしているのか。そもそもイギリス連邦や中東からの移民や避難民、EUからの出稼ぎ労働者によって仕事を奪われてきた白人達の危機感が離脱賛成派を勝利させた。職を奪われて格差が広がった白人中産階級がアメリカの次期大統領にトランプを選んだことと背景は重なる。

旅好きにとってテロは勿論だが、欧米の保護主義的な動きも心配だ。

【和の食材】

またしても、とりとめない雑文になった。最後に、街角で見かけた和の食材に少しだけ触れておくこととしよう。それが「国境なき江戸ソバリエ」としての仁義だろう。

ロンドンでは巨大ショッピングモールの中に上質なオーガニック食材を揃えた王室御用達の高級スーパーが入っている。「ウェイトローズ」といって大手デパートの傘下にある。棚を見



るとSOBA、UDON、SUSHI RICE、NORIと印刷された綺麗なパッケージが目立つ。表にはClearspringとある。調べて見ると英国人の会社で、ロンドンに本社を置き日本の自然食品を本格的に輸入販売している。穀物菜食主義に基づいて無農薬で添加物、保存料など一切含まない健康食品に限定していて、日本食の普及に大いに貢献したとして2007年には農林水産大臣から功労賞が経営者のドラゴンに贈られた。



カンタベリーでも自然食品店をのぞいてみる。ここはロンドンと異なるブランドの有機蕎麦やアマランサス入り蕎麦などの乾麺を販売している。こちらにはVeganと印刷されている。



て、アメリカのカリフォルニア州にある **KING SOBA Noodle Culture** という会社が製造しているようだ。やはりグルテン・フリーが特徴で蕎麦、キノア、アマランサス、玄米など有機の食材から麺、ラーメン、味噌などを作っていて、日系人の手によるものではないかと想定される。アメリカはもとより、英国やヨーロッパ諸国にも広く輸出・販売しているそうだ。



今、TPP が揺れている。こうした貿易協定を結んでおけば日本ブランドの価値を毀損されることも避けられるだろうに。ロンドンにあるパブのチェーン店で見かけた驚きの光景を紹介しよう。あろうことか「WAGYU BURGER」という名のついたハンバーガーが堂々と売られていた。

メニューには「うちの豪華な和牛バーガーは、日本式に育てられた柔らかくてジューシーな高品質の牛肉で作られている・・・」とある。面白半分注文したところ、冗談もいい加減にせー！という代物だった。まあ、褒め言葉として捉えて

おこう。和食は世界遺産として脚光をあびているが、日本の貴重なブランドが世界中で適当にいじられて、一体何だったのかということにならなければ良いのだが。

それにしても、スコットランドのエジンバラ空港に回転寿司があったのにもびっくりした。ロンドンに本社を置く英国人経営の「Yo! sushi」というチェーン店で、働いている従業員やうまくそうに食べている客の全てが英国人とお見受けした。

